

創刊は
およそ
25年前

龍屋新聞

龍屋新聞社

鴨川市代623

TEL 299-2854

デジ 0470-92-9912

竹ザル・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

竹カゴ・竹カゴ

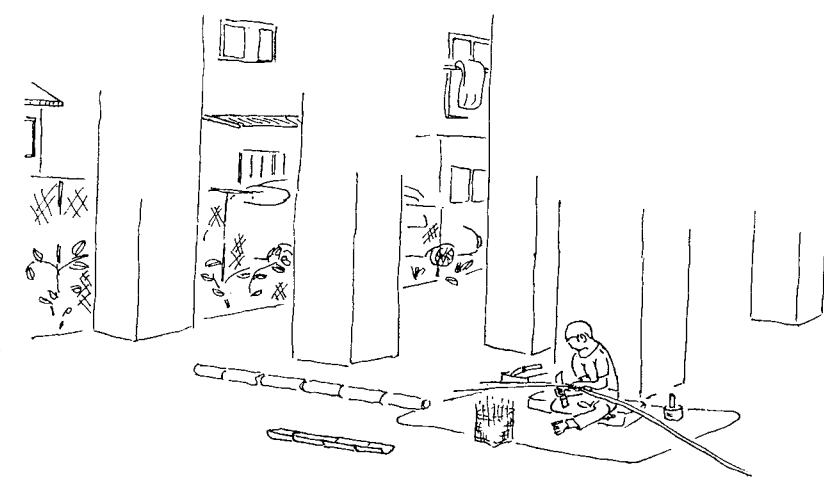
竹カゴ・竹カゴ

「JRの人、何か言いに来た？」

線 武 総
下 総 中 西 船 橋
高 架 下 で。

高架下を当社が占有して一年が過ぎた。その間に住人は急増し、また空間はせまられた。

初めのころは人影はほとんどなかった。一面はコンクリートが張ってあるが、北の端は草が生えている。叢に殺ボールが広がっているのが、JR屋は気になっていた。明らかに人の手になる広げかたである。近くの金網にはうす汚れた毛布が干してある。それが強風で飛ばされ、タタキの上に広がる。数日たっても拾い上げる気配がない。



突然目の前に金歯をのぞかせた初老男が立った。「これいくらで売れるんだい？」

唐突な問いにドキリとする。JR屋が答える暇はない。と。JRの人、何か言いに来たか？。近くの橋脚にこんな張り紙が貼ってあった。「JRの所有地につき、私有物はただちに撤去いたします。なお、男は自分の荷が撤去されるかどうか、数日離れたところから様子を見ていたようだ。西隣の八幡駅周辺の高架下住人はたちのを迫られているようだ。男の持ちこむ荷が翌日から目に見えてふえていった。」

何を隠そうか

- 。上敷きニ枚
 - 。衣類
 - 。布団
 - 。弁当のおかず（ふりかけ、梅干し、佃煮）
 - 。タライヒボリタンク
- 竹割リ包丁、ふち巻、ペンチ、鋸、鉄である。他のものはプラスチック製の水溜に入れられ、上からトタンを被せる。以下の物が内容物である。

「あ、カゴ屋さんがいる。いつもここで編んでいるの？。犬の散歩いって、からまた来るね。おはあちゃん、行こっ」(小一女子)

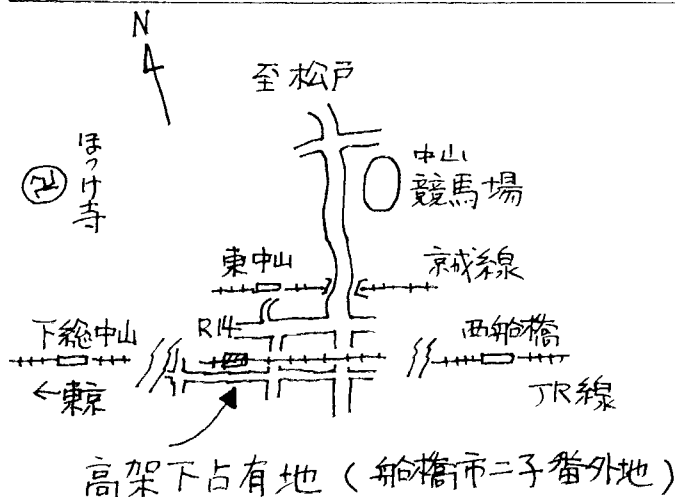
「売ってるの？。これ？。いくら？」

「あ、カゴ屋さんがいる。いつもここで編んでいるの？。犬の散歩いって、からまた来るね。おはあちゃん、行こっ」(小一女子)

七月三十日

客三組

こうかしたごよみ
高架下層



『村の隠物・預物』では
中世の乱世を生き抜く村人
の知恵が披露されている。
戦火から家財を守るた
めに平地の民は山里に
入っていく。山深くには
なく、平地にあって寺に
預り物をする場合もあ
る。村人が群れをなして

生きている中世

むき
無縁

を嗅ぎ分ける達人たち

現代に生きる高架下住
人・占有者も明らかに
隠し物が日常のことに
なっている。しかし住人た
ちが群れをなすことはない。
また、盗まれたからとい
って、下手人を探す

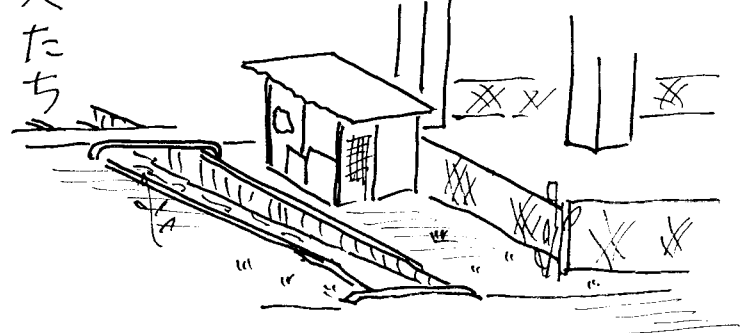
参考文献

平井社『中世の文化史』所収

藤木久志著

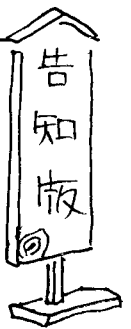
『村の隠物・預物』

隠し場を求めるわけだ
から、そこには捉が生ま
れる。預り証が渡され
後日の返還に用意さ
れた。その預り品に収
ういを定めて盗む者
も出たが、そうした者
は寺の側で処刑した例
もある。(『多聞院日記』)



手間をかけることはない。
痛手にはちがいないが、
財産を失ったという意
識は薄い。時間を惜しま
ずに粗大ゴミの山を探し
回れば、代替品はた易く
手に入る。煩わしいのは
盗人ではない。丁Rの人
が一番気になる。他人の
土地を無断で使用して
いるという腹い目がある
からだ。
そんな腹い目から解放
されたいとの思いから、

コンクリートのタタキから
微妙な距離を置いて
いる人もいる。
高架下を直角に横切る
用水路があり、その両岸
ニメートルは鉄柵の外に
ある。水路は農業用
に開かれたものかもしれ
ないが、現在はドブと化し、
排水溝となっている。
いすれにしろ、丁Rが地上
を占有・所有する。前か
ら流れていたであろう、
から、無縁の地である



出版 九月三十日

『埋め火』 えいほん社 3000

著者 稲垣 俊

クラフト展 十月四・五日

『工房から』 国 市川市

コルトンプラザ屋外会場

〇 展覧会 来月五月

『文芸とエッセ』

東京・世田谷・梅ヶ丘

ギャラリー・GALLA

ことにはお通いしない。
幅ニメートルの山岸は
土がむき出しになつて
草におおわれていく。
段ボール囲いの小屋の
住人は誰にとがめられ
ることもなく、ゆうゆう
と昼寝を楽しんでいる。
(注) 無縁・むきん
世・俗縁の世界から切斷
された場所や人の状態を
示す仏教語。また、細野
善彦によって中世の自由の
形態として提起された。

七月三十一日 客二組

「いなか育ちだから、かご屋さんが
なつかしいなあ。竹をこつやつて
細くするのが素人にはできな
いんだよね」(ヘキロ 離れたとこ
ろに住む六十男)

「なつかしいわね。私は四国の出な
んだけど、子供のころ、ご飯を
いれるカゴがあつて、何て言つた
っけ、朝起きて、そのカゴからご飯
をついで食べるのが嬉しくて……
ひとつ作ってもうえなにかしら？」

八月五日

仕事場所をニメートル西へ移す。
高架をくぐり抜ける小径から
離れることになり、通りすがり
の人が声をかけにくくなった。

八月十日

「うちやあ、クマデ作って、義草の
観音様に御してんだよ。私
の子ども、三つ、葛飾の駅(現
京成西船橋駅)の、いま、みずほ
銀行のあるところに茅葺き
の家があつてねえ、そこがかご
屋さんだったんだよ。もつ
五十年以上も前の話だけど」

小林秀雄

美を求めぬ心

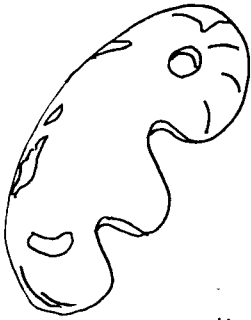
展

2002年10月
2003年8月

国内五ヶ所を巡回した展覧会である。小林秀雄の生誕百年を記念しての企画であった。

評論の世界で新地を開いたその人は、生前、多くの肩董、絵画、工芸品に囲まれて暮らしていた。二葉の写真がある。勾玉を両手で摘みあげている小林秀雄が写っている。玉は掌に収まる大きさであり、端に丸い小さな穴が抜いてある。小林秀雄は人差し指を穴に差しこもうとするが、はいりない。それを見おろす人の

勾玉（弥生時代）



瞳は苛立ってはいない。

穴の口と指先でなぞり、感触を察しんでいるかのようだ。ちょうど、子どもが小動物が何かに触れて心を躍らせているふうにも見えてとれる。

鑑て、触れて、素の自分に帰っていく。リクツはどこにもない。

会場には平易な空気が漂っていた。小林秀雄の肉体を金縛りにしたゴッホの「鳥のいる麦畑」の囁に、短い感動の叫びが添えられていた。

訪れた人は、絵を眺め、文章を読んでいる。

対象は幅広く、ゴッホ、

ゴーギャン、鉄斎、吉田

鐔、埴輪など。

「美しいものが、ひとりの人間の眼で一貫して、それが、やがて、い

は、今をばりて



(弥生時代)

ならべてある。文芸と工芸の分別も不要のようだ。

その昔、アルタミナの洞窟に絵を描いた人は、絵かきには違いないが、同時に食器も作る人であった。狩猟の名人であったが、もしれない。日常の暮らしの中にすべてがあった。美しいものを求める心は、選ばれた人だけの偉そうな心ではない。

二〇〇四年五月に「文芸と工芸」展が開かれる。GALAの南廊十坪を記念した企画である。昭和四五年（一九七〇年）に鹿児島島の臥蛇島が無人島になったが、その直前に島の土となった古老の物語りが刊行された。その一文から編み出されるものが展示される。それはかなりではなく作られた造型物が文芸をほみ出していく。素材はコゴロ、ミツマタ、竹、土布、草などである。デザインの世界から芳山明氏が参加する。文章は当社社主である。（GALA〇三・三四三九・三三六四）のもの

山手線
新宿
梅田
GALA
「文芸と工芸」展
2004年5月

小林秀雄は鑑る眼を磨き、それを文章に定着させることのできた人である。書写人が土をこね、顔料を混ぜ合わせたうどうなるのだろうか。作って、鑑て、文字で表現すること。ひとりの人間がやつたらどんなことになるのだろうか。

ここで身辺の環境を説明しておこう。JR総武線の直下が、ご屋のしのぎの空間である。下総中山駅と西船橋駅との中ほどの高架道の下である。桁柱ふたつ離れたところに隣人がいる。眼鏡の底のやわらかい目のその人は「本」と「デニキ」を仕事にしている。四時には自転車を跨って、ゴミ集積所を巡って雑誌を集めて回り、それを原本中山インター（京葉線）入口にいる仕切り屋に卸していく。粗大ゴミの日はラジカセやテラデッキにゆらいをつけて回る。いつも折目が入ったズボンを身につけ、しめれたグレザーをはいている。垢焼けた肌と襟元の汚れ目を「つぶれば、そこいらの勤め人と変わるところがない。かご屋がどんな種類のカゴを編んでいるように、グレイッシュビニだなあ、一個編んで一万円かい」とあきずに声をかける。

八月十五日
「駄目だ、あ、おめえさまも行って、みろ、ちやあ、はあ、人であふれて、並んでねば、職探しのカードも見らんね。」

灰の循環

「五年前にかご屋は全てを灰燼に帰した。風呂釜の残り火が引き金であった」
 こう表現するとき、「万
 事休した」の意味になる。
 灰はすべての終焉を告げ
 ている。
 では、花咲かじさんはどう
 なのか？ 灰を撒くことで
 再生をはかった。同じ灰
 なのに扱われ方が別なよ
 うに思える。
 失火をみた翌年、かご屋
 のいたるところからトマト
 が芽吹き、ひと夏の食
 卓を賑わせた。種を
 まいた記憶はない。ただ
 てさえ栽培が難しいとい
 われているトマトが、何の
 手も加えずにである。
 木灰の強いアルカリ質が、
 病原菌を仲立ちする
 微生物を寄せつけな
 かったのだ。これはじい
 さんが手がけるものが、花
 から野菜木に替えられ
 たにすぎない。よって、
 かご屋の人は灰色

ではなく、明るいトマト色
 へ塗り替えられた。
 エネルギー不要の法則が
 生きているのか？

△ △ △

十月四日から始まる

「工房からの風・craft in action」
 野外展には六十人の作り
 手たちが参加する。そ
 の中の数人が「灰を巡る
 循環」を試みている。
 木工作家の小美濃氏
 が木叩れで燃やす薪ストー
 炉、燗くするみに限られ
 た燃料から出る灰には
 他の不純物が含まれて
 いない。それを世に見受け
 た陶芸家の萩原氏が



釉薬として使う。不要と
 なった上澄みの灰汁は
 手濃き楮(こうぞ)紙を
 作る田村氏に渡される。
 楮をアルカリで煮る過
 程があった、これまでの

田村氏は草木灰を使うて
 いたという。灰汁に替え
 てからは、「紙の白さが
 草木灰を使ったものとは
 明らかに違う。日本の白
 はこれではないかと感
 じた」とうた。

純粋な白なんて、はじめ
 ての雪の中にもない
 純粋な黒なんて
 盲目の唄の眼にも
 見えない
 谷川俊太郎

灰買商「萩原氏」(萩原氏)

萩原氏は灰の製
 造者に何を戻せ
 るかを考えた。
 なんと、トランプ
 のババ抜きにに
 いる。環えしたも
 のは「小美濃灰」
 を塗った陶製の
 引き出しのつまみ
 であった。

灰とかご屋

山から切り出した竹を
 灰汁でゴシゴシ洗うと、
 表皮にびろりとした衣
 体が浮いてくる。それを
 ふま取れば、竹が内部か
 ら乾燥し、組織が変
 質しないですむ。かご
 屋が熊本の人吉盆地
 で修行している際に、
 教わった知恵である。
 現在、竹細工の産地では
 カセイソーダーの十五%前後
 夜で丸のままの竹を煮沸
 している。この過程を油
 抜きといひ、できた竹を
 晒し竹と呼んでいる。カセ
 インダーを含む液体は排
 水溝にそのまま流され、
 川に落ち、海へと向かう。
 水の汚染を心配して、別
 府に住む竹作家の村まこ
 み氏が県の試験所に
 問い合せてみたが、回答は
 なかった。灰を使った油
 抜きができて、うり郡会
 で、どうやって竹作家が
 生きていけばいいのか、
 これからの話である。

野外展「工房からの風 craft in action」

へ行こう。

十月四日(土)・五日(日)

会場：ニッパコルトンラザ

屋外会場

○六十人の作り手

ガラス・木・陶・織り

紙・皮革・草・ローウ

etc...

○竹ドームの土壁塗り

をやってみよう。

左官の横山和弘

氏・萩原氏の子氏

の指導で。

竹ドームは当社の手に

はります(笠原尚)

列が建物の外までつながって
 るなあ。俺らはあ、田舎さへ
 帰るのうかなあ。なんぼええ
 が知れねえ。俺も秋田に家
 さああるし、金送ってもらうて、
 四万円もあれば……運賃は二
 万円もあればええが、ほら、世話
 になつて、かう。こちいたつちあ
 食堂で飯食うても、パイやつても、
 金だ、ちやあ、なあ？ 俺うあ、
 はあ、田舎さ帰えって、なあ？
 えんてねえ、こちいた、ちやあ、
 仕事もねえし、なあ、駄目だわ

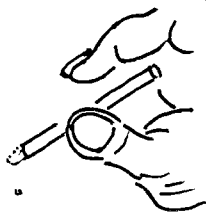
直し灰

かご屋は灰を多用している。ワラビのアク抜き、馬鈴薯の種の植えつけ、それから猪やタヌキの皮のほめしにも使う。皮に少々肉が付着していても、灰を強くすりつければ虫がわくことはない。

△ △ △

まだ沖繩が本土に復帰する前の話である。祖国復帰要求、行進団というのが組織され、南の摩武仁の丘を三手に分かれて出発した。ひとつは東に、ひとつは西に向い、海岸沿いの道を北上する。かご屋は東の一団に加わった。十数日後の最終日には北端の辺土岬で合流し、海上集会というものをやるのだが、二日前は突然、この部落で休んだ。夜、部落に一軒だけある飲み屋へかご屋は足を運んだ。五人座ればいっぱいになるカウン

ターの隅でふたりの若者がコップで泡盛を飲んでいた。酔いが回っているのか、張りあっているような声で島口(しまぐち)を飛ばしていた。ふたりはタバコをくわえていたが、灰皿を使わない。時をついた腕をコップの真上にもっていき、親指と中指でつまんだタバコを人差し指の腹で軽く叩く。灰がばらばらと舞い下り、参遊しながらコップの底へ沈んでいった。かご屋の冷めた視線を目の隅で捕らえたのが、若者は体をねじって笑顔を作った。



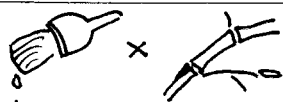
「日酔いしないぞ、こうすると」
強い沖繩訛りにうながされるようにして、かご屋も真似をする。
三十五度の古酒(ふるしゅ)がまろやかさを増していた。キツネにつままれた気がした。後日、口伝の文化誌(こぶんし)に(小泉武夫著)をひもどいて得心した。灰に多く含まれるアルカリ性化合物が酒の酸を中和、脱酸する。また、木灰は炭素を含み有するから、炭素系のもつ吸着性が酒の不快感や不純物を取り除く。なんと、平安時代初期に著わされた日延式(にんえんしき)にすでにこの効用が記載されているのだ。



△ △ △

堅木の丸太がそのままくべられるから、初めのうちは煙が室内に低く垂れさがり、煙くてしかたがない。客たちは煙りを避けようと上体をねかせ、首をかがせる。目を最大限に細め、いざこざをよらして話を続ける。そのうち煙りの輪も上昇し、丸太は鮮やかな朱色に変わり、それが広い室内を柔らかに照らし出す。翌朝、堅木が残したはずの大量の灰がみごとにすくい採られていた。友人知人が灰汁(はいじゅう)巻きを作るために貰っていったのだ。

野良にあって枯れ草を燃しても、知らずのうちにビニールの破片や空き缶が混ざっている。ましてや、堅木だけの不純物なしの灰は、山村にあって、易々と手にはいらない。民宿(みんしゆく)イロリの灰は、ダイヤモンドより輝いている。



テラの対談

2002年11月8日 高架下で収録

「こんにちは」
「やあ、今日はあったかいねえ」
「オレは西船の駅のすぐそばに住んでんだけど」
「じゃあ、通りすがりかい？」
「違う。ここの裏を通った。竹割っているのを見て声掛けようかと思ってた。け、一は懸命割っている最中だったから、けがすうといけねえと思うて……」
「そうだったんかい。」
「いいよな手に職があるって。オレの親父は家具職人だったけど、オレはあとを継がなかった。ペニキ屋になった。」
「手職が何でいんだ？」
「応用が利くからだよ。ペニキ屋だって同じじゃあないか。」
「ペニキ屋は何もかも売っている道具で済ましてしまうからなあ。炭を採るの、いじやあなんかい。物干しなんかは炭を塗るけど、炭を自分で採るくらいはあ……」
「これは何の道具だい？」
「カゴの縁を巻くときに……」

ゴブタマさんは、作品の内容に関して何もいってないのですが……
いいの、いいの、皆さん黙って読みましょう

一一一九七九

また来るよ。